

祝JGAP取得、科学的に根拠がある安全を届けるみつば生産の育葉産業！

GAPという言葉が聞かれたことがありますか。適正農業規範と訳されているGood Agricultural Practicesの略ですが農産物安全性確保の目的で1997年頃ヨーロッパで始まった生産現場における管理基準を定めそれに則って運営する、いわば農業版ISOというものです。すでにEUではEUREP_GAP(ユレギャップ)が普及段階で量販店などに出荷する農産物についてはGAP認証が生産者の必須条件となっています。

アジアでもEUREP_GAPと同様のChina GAP、Korea GAPが本年から運用開始されはじめました。日本では自治体・生産団体、量販店などがそれぞれ独自の基準を設けて別個に運用の時代から、いよいよ日本版GAP(JGAP)がしくみとして運用開始となり、この12月大分県豊後大野市の(有)育葉産業(栗田洋蔵代表)が九州地区では2番目、大分県では始め

てJGAP認証を取得されました。

栗田さんは7300㎡のハウスで水耕みつばの単品生産、年間24万束、売上1億5千万と国内トップクラスの経営と先進的な取り組み姿勢で知られていますが、GAP取得は「安全・安心を追求した結果」とのこと。有機＝安全/ベターという短絡的な価値観が横行していますが堆肥への病原性大腸菌の混入リスク、過剰施肥による環境負荷増大、減農薬基準のあいまいさ・・・などなど「根拠のない安全神話」がまかり通っているが「安全が科学的根拠に裏打ちされ担保できている」それが一番大事だの思い。

認証取得まで約1年半をかけてコツコツと作業の合間をみて取り組まれ、まず実施したのが消毒用石鹸での手洗いの励行とタオル毎日交換、入室時の靴の殺菌、HP上での栽培履歴公開、以後トイレ専用スリッパ・専用の農薬保管庫・温室内柱間にドリ

フト防止カーテン・作業場に網戸などの設置・作業者の帽子着用、記帳できる各種管理帳票(農薬散布、農薬管理台帳、肥料管理台帳、月例点検記録など)の作成と大変といえば大変ですが、やっている事の明文化なので誰にでもできる。でも一番これに苦勞されたとのこと。費用は設備の改善に数十万円、審査費用・研修費用などで10万円程度とのこと。

価格、基準なども否応なしにグローバルスタンダードで考えないとダメな時代。GAP取得はそれらの世界で活躍するためのパスポートあるいは共通言語を入手したとも云えますが、栗田さんは「消費者に安心・安全を届けるために自分は管理ツール・手段としてGAPを選択した。安全な野菜の生産供給を担う者として行き着いた取組。協力するので続けてくれる人が今後増えてほしい」。熱い思いが伝わってきました。(編集子)



(有)育葉産業の農場



ドリフト防止カーテン



農薬保管庫



トイレ専用スリッパ



JGAP認証